



TITLE:

図書館雑感

AUTHOR(S):

川口, 桂三郎

---

CITATION:

川口, 桂三郎. 図書館雑感. 静脩 1967, 4(3): 1-2

ISSUE DATE:

1967-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36412>

RIGHT:

## 図 書 館 雑 感

川 口 桂 三 郎

この夏図書館本館に冷房が入ったのは最近の快ニュースである。どなたが推進されたのかは知らないが、多少は障害もあったことだろうから、御英断のほどに大いに敬意を表したい。暑い京都で夏を送った学生諸君にとっては、百万言の“読書の奨め”よりも有効であつたらう。新聞によると、その恩恵が他大学の学生にまで及んでいる由で、ますます結構なことといわざるをえない。もっとも冷房などは図書館本来の使命とは関係のうすいことで、学生の厚生面の問題である。しかし大学におけるこの方面の施設が非常に遅れているのだから、冷房一つといえどもその意義は大きい。

近代図書館の本来の使命となると、まず利用面では、図書館職員が利用者の資料の検索に対して強力な指導力を持つことが必須の条件とされているようである。しかし一般の公共図書館と違い、大学図書館においてはこうしたことの実現は非常に困難であり、またさしあたって必要とも考えられない。

図書館の内容については、当然のことながらその充実がいよいよ必要となってくる。ことに生活様式の変化に伴って個人で膨大な蔵書を持つことが困難となり、また少なくとも自然科学にたずさわっている大部分の者にとって完備した図書館がある場合は、個人の持つ蔵書の意義は急速に薄らいできている。私自身についていえば、月々送られてくる専門の雑誌類も必要なカードをつくれれば（これがなかなかできないが）、あとはすててしまい、必要な時には研究室なり図書室のものを利用することにしている。したがって図書館に対する依存度ははなはだ大きい。ただ図書館といっても地理的に離れている関係もあって、中央図書館は利用しにくいし、また利用する必要もない。したがって図書館への関心をもっぱら学部図書室のことになるのは当然である。

ところで農学部図書室は事情があつて、昭和39年3月まで十数年にわたって図書室としての機能がとまっていた。同年の4月からにわかに活動がはじまり、3、4年の間にどうにか図書室らしい体裁と機能が備わってきた。しかし長い間の図書室に対する不信感と各研究室が学部図書室なしにやってきたことが、学部図書室の発展の上に大きな妨げになっている。各教室でもっている図書室（雑誌室）を統合して、総合的な学部図書室をつくることなどは

当分むずかしそうである。

学部図書室として今後の貢献の道は、今まで以上の内容の整備とともに新しい仕事としてはパンフレットや謄写印刷物などの収集整理であろう。このような出版物は、公式の文献としては認められないものもあるが、一方研究上の資料としては極めて価値の高いものもある。国外のものはもとより、国内のものも雑誌や単行本とちがって、多くは再入手が不可能に近い。どうやら周囲の研究室でも、この種の膨大な資料が部屋のすみにねむっている様子である。ただ素人の個人が整理をするのは、時間的にも技術的にもまず不可能である。専門家の意見をきくと、私の学部の場合は職員1名(?)あれば十分だそう。調査旅行から帰ったあと、集めた資料を図書室に引渡しさえすればことが済むとなれば、さぞかしさっぱりするだろう。まして他の人のお役にたつこともでき、図書室も金をかけずに充実するのだから一石三鳥ともいえる。この仕事はまだどの図書館(室)も手がけていないそうである。その理由の一つは金を出して買ったものは保管に責任をもてるが、ただのものはどうも力が入らないという。冗談でしょうね。

(農学部教授)

## 新村先生の御蔵書

浜 田 敦

私が物心ついた頃から、ずっと長い間、京大の総長といえば荒木、図書館長は新村ということになっていたような記憶がある。それもそのはず、新村出先生が、教授としては初代の、図書館長になられたのは、明治末年私の未生以前のことに属し、停年退官と共にそれを辞されたのが、丁度私の大学に入学した昭和11年の秋だったのである。このように、新村先生は京大御在任のほとんど全期間を通じて図書館長を兼ねられたのであるが、これは、先生が全くその職に御適任であったことを物語るものといってよい。先生がまだ学生の頃は博言学とよばれた、その御専攻の学問の必要上からも、和漢洋の古今にわたる文献に精通され、また趣味としても、こよなく書物を愛された先生であった。その御著書、論文の過半は、何等かの意味で、本に関することが問題となっていたといえるであろう。

しかし、本に親しみ、本を愛された先生ではあったけれども、一部のいわゆる愛書家に見られるように、書に淫するとでもいうべき、私蔵欲、物質的執著は一切持たれなかった。従って、先生の御蔵書には、珍本、稀覯書というべきものは全く見られず、すべては、学問の必要から購入され、あるいは、門下生などから献呈された、実用的な本ばかりであった。戦争も漸く末期に近く、京都でも家財などの疎開が問題になった頃、毎週一度お仕事のお手伝いに行っていたそのある日、何かの話しの序に、自分の蔵書には疎開しなければならないような珍本としては何もないが、少しでも人の役に立つものをより安全な場所へ移したいとは思っても、書齋、書庫の整理さえ、この年では思うにまかせぬとお言葉に、それなら私がお手伝いいたしましよと申出て、当時研究室につとめていた徴用のがれのお嬢さん方数人を引きつれて、一週間ばかりもかかって、先生のお宅の書庫の隅々までひっくりかえして大掃除をしたことがあった。

そのお蔭で、私は先生の御蔵書に精通し、先生から逆に、あの本はどこにあったかねとた